

# ちよつと一服 講座

# 天皇杯に輝く名茶 そのぎ茶

～その歩みをたずねて～

東彼杵町史談会会員 谷山 満三郎

## 2. 名茶のふるさとを探して (先月号に続く)

東北大学、芹沢長介教授は、九州ではじめて尋ねあてた先土器時代の遺物を探し出された本地寺住職井手寿謙師と出会うと同時に、この石器類が一万年をはるかに超える旧石器類にも入ろうかという先土器時代の遺物類であることがわかったのである。井手寿謙師は人も知る町の考古学者、中学一・二年(旧制大村中学校)の頃から石器・土器・古墳の副葬品等を大村野岳、江串、千綿などから集めて今日まで五十年、その採集品はさながら博物館の如くである。もし二人のめぐり合いがなかったら、あの福井洞穴(旧北松浦郡吉井町、現在の佐世保市)発見の偉業は何年も遅れたかもしれないし、あるいはまだ世に出ていなかったかもしれないのである。



《 江串鉄砲組の勇ましい姿 》

更に驚くべきことは、岩宿(群馬県)と同類の、これらの石器が芹沢教授よりも三年早い昭和二十一年に井手寿謙師によって採集されていたということである。

芹沢教授はコア類が野岳堤から採集されたことを聞き、現地に赴いて踏査され、ここが紛れもなく先土器時代の遺跡であることを確認され、このことを学会に発表されたのである。

井手寿謙師の名声は考古学会に響き渡り、これから本地寺の門を叩く学者は引きも切らず、今それらの石器類はことごとく新設される史料館に陳列されようとしている。こうして野岳周辺が一万四千年を下らない遠い昔の遺跡であるということが判明したことから、推量すれば標高三百メートルから四百メートルのところに原始住民が生活していたことは間違いない。

このように南向きの郡岳に連がる武留路山台地、千綿台地、赤木台地、中尾台地一帯には野岳原始人が、獣を捕え、木の実を拾い、草木の根茎を食べたりすることもあり、横穴を作りそこで雨露をしのぐなどの生活が続いていたものと思われる。(この頃加藤十久雄氏、八反田郷出身。長年県立特殊高校の教師を勤められ、考古学の造詣が深く、赤木、中尾、太ノ原、大野原高原、千綿木場、中岳などさらに西彼杵半島なども探索され発表された教師である。 【大村史話上巻から】

広域農道大村東彼線の木場分岐点を百メートル  
足らず一ツ石側に入ったところに一枚の広い茶園  
がある。寺井正和氏の茶園で立派に手入れされて  
いて、日頃の丹精が窺はれる。先代寺井正守氏は、  
東彼杵町議会議長を務められ、茶業の発展に生涯  
を通じて貢献された人である（事蹟については後  
述する）筆者は当時の職務から故寺井正守氏の開  
畑予定地の現地確認に立会った思い出がある。こ  
の一角から西北を展望すると木場郷水田が広大に  
広がって見える。副町長さんにたずねたところ、  
木場郷水田面積66.8ha見渡すところ遊休水  
田は全くないといってよい程の黄金の穂波が静か  
にゆれている。この一帯は出口山湧水日量1万四  
千tを水源として開田されたが、大村藩の藩境警  
備として丹後守、喜前（大村藩、初代藩主）の代  
に給人（藩主に仕える侍の位階おおむね十石以上



《 一ツ石の地名発祥といわれる巨石 》

を大給とし、それ以下を小給として年給与が定められ、藩の蔵米から支給されていた）の次、参男  
百人を選び、鉄砲、足軽として、久原の里に屋敷を与えられ、この辺を百人衆小路と名付け、古来  
は用筒百挺と言はれていた。この部隊が旗本、足軽といわれ平時は兵事訓練に励み、時には城の補  
修等にもたづさわっていた。後年丹後守喜前（大村藩初代大名）は大村彦右衛門純勝に命じて、慶  
長十七年、普代（代々古くから仕えていた家来）小身侍の末子で筋目を正し、始めて鉄砲の者とし  
て五拾人を選び、鈴田村（今の世に鈴田組という）に置いて、諫早口の押おさえとした。翌十八年五拾  
人を選挙して藤津口の押として江串村（江串組という）に置いたのである。是が江串鉄砲組の始め  
である。爾後或は新田開発に当り、或は取立（兵事訓練）に励み勤めたが、その後の組員の移動に  
よって新田所有に問題が生じたので鈴田組、江串組と名付け石高六石宛と定めた。転勤などにより  
新開田の帰属が問題となり、又新転入士の開田に当たっても問題が生じたので、後年六石ならし、（約  
6反歩）で帰属を定めたが藩政後期には、鉄砲組を世襲とした。明治維新となり地租改正等による  
変革があったが、昭和中期の農地改革により解決されたものと判断する。

註、大村喜前（よしあき）の父は戦国大名として名を挙げた純忠で、喜前は永禄12（1569）  
年生まれ、天正15（1587）年純忠隠居ににより、大村家を継いだ。この年豊臣秀吉の九州征  
伐に際し、父純忠に代わり出陣し加藤清正の助力をうけて旧領を安堵（以前どおり認められる）さ  
れた。文禄元（1592）年朝鮮出陣し、慶長3（1598）年帰国、兵農分離を行い玖島城を構  
築して、三城より転居した。慶長19（1614）年鈴田村、諫早口の押、江串村、藤津口の押と  
して鉄砲、足軽組を設け配置したのである。多くの実績を残した初代大村藩主喜前は元和2（16  
16）年8月8日死去48歳の早世であった。（以下、次号に続く）

【参考文献：町誌『水と緑と道』】